大地に刻まれた西会津の足跡

地形からみた西会津の歴史 その7

―越後街道―

文：田崎　敬修

越後街道は会津若松と新発田を結ぶ総延長23里(92キロ)の街道ですが、道筋は越後でも会津でも何度か変わっています。

佐渡の金や金山で働く無宿人・罪人を搬送する北国・三国街道に支障があった場合は、越後街道が使われたので北国・三国街道と共に、東海道などの五街道に次ぐ街道ともいわれました。

街道は地形・地質に順応して作られました。新発田と津川の間には越後街道最大の難所である諏訪峠が立ちはだかりますが、街道は広く分布する花崗岩類の山地ではなく、比較的柔らかい新第三紀層の山地を選んでいます。津川から花立・平石の先までは、ほぼ音無川沿いに街道は作られていますが、福取付近から先は地滑地の比較的なだらかな山地を通り、鳥井峠から一気に地滑地を下って宝川に入ります。

そこから、鬼光頭川端を上流に進みますが、すぐ峡谷になるため山地に上がり、白坂手前の湿地帯ではこれを避け山裾を迂回します。川谷の北側山地から流下してくる縄木沢右岸の花崗岩類風化層を削って街道ができており、野尻への最短ルートです。この沢は花崗岩類と新第三紀層の接合部にできたもので、車峠に近付くとU字谷になります。これは、岩質の異なる岩体接合部が浸食されてできた谷地形と考えられます。

野沢盆地内は、段丘上を進み大畑の先で北側の平坦な山裾に上がり、山裾端を軽沢に向かって街道は通っていましたが、現在は国道49号建設で山裾が掘削され、街道のかなりの部分が消滅しています。古い街道は切石川を歩いていましたが、雪崩から逃れるため江戸時代中頃、切石川右岸を掘削して新道を作りました。軽沢と天屋・本名から束松峠への道は多くが谷の中腹を通っていますが、唯一尾根を通っている所があり、ここが街道中最も美しい場所で、この末端に街道最大の一里塚があり抜群の見晴らしです。ここから先の街道の一部は、大正14年の大地滑りで崩壊しています。これは束松・鐘撞堂峠一帯の山地は、年代が新しく地層の固結が弱いためです。鐘撞堂峠を越すと会津盆地の自然堤防などの微高地上を進んで会津若松に到着です。



▲越後街道と峠、町内宿場など

今月の表紙

今月は、9月27日、交通安全パレードの後に行われた福島県警察音楽隊による演奏会での一コマから。秋晴れの空の下、音楽隊の皆さんの演奏と曲に合わせて広がる手拍子。会場内は、笑顔であふれ心弾むひとときとなりました。



編集後記

道端に落ちているどんぐりを見ると思い出す出来事。子どもの頃、弟と一緒にどんぐりを拾ってきて庭に植えたことがありました。大きくなれ！と毎日世話をし無事に芽を出しましたが、いつの間にか祖母が親戚にあげてしまいました。せっかく育てたのに！と思ったあの日から幾年月。あのどんぐりは今もどこかで育っているのでしょうか。（三留）



にしあいづ
広報にしあいづ №817　令和8年11月号
発行／福島県西会津町　編集／総務課　TEL 0241-45-2211（代表）
ホームページ　https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/

PRINTED WITH SOY INK
この広報紙は、環境に優しい大豆油インキを使用しています。